片岡勝旧蔵「銭村健一郎送信写真」について

正木喜勝

阪急文化財団の正木です。ステイプルズさんの好投を受けて，うまく中継ぎの役割を果たせれば幸いです。私は演劇が専門の学芸員ですから，ここにいる誰よりも，おそらく聴衆のみなさんよりも野球について知らないと思います。ではなぜここに立っているのか。それは先ほどステイプルズさんが紹介してくださったように，阪急文化財団が所蔵する，今回のテーマに関する貴重な資料をみなさんに見ていただくためです。私なりの考えも述べるつもりですが，議論の材料を提供できればと思っています。

さっそく資料をご覧ください（図1）。これはすでによく知られた写真です。実物のサイズは187 × 239ミリメートル。被写体は左よりジョニー中川，ルー・ゲーリッグ，銭村健一郎，ベーブ・ルース，フレッド吉川，ハーベイ岩田。場所はフレズノのファイヤーメンズパーク，日付は1927年10月29日です。右下にはFrank Kamiyamaと撮影者のエンボスもあります。そして裏面には銭村からのメッセージが書かれています。このメッセージこそが重要なのですが，その前に資料の来歴からお話ししましょう。来歴を知ることはその資料を正しく歴史に位置づけることにつながります。

図1　銭村健一郎送信写真表面（阪急文化財団蔵）

旧蔵者片岡勝とは

阪急文化財団は大阪府池田市にある公益財団法人で，逸翁美術館・池田文庫・小林一三記念館を運営しています。美術館では小林一三のコレクションを展示しています。小林一三は阪急電鉄・阪急百貨店・宝塚歌劇・東宝などの創業者で，逸翁はその雅号です。池田文庫は阪急関係の資料と，宝塚歌劇や歌舞伎など演劇関係の資料を所蔵する専門図書館です。私がこの財団で働く理由もここにあります。さて阪急にとって野球といえば，阪急ブレーブスや西宮球場を思い起こす方もいらっしゃるでしょう。まさにその縁で私たちがこの資料を所蔵するに至った

のです。2012年1月，片岡勝という人物の御遺族から野球に関する写真資料176点の寄贈を受けました。この写真はその中の一点でした（寄贈資料全体の概要は『阪急文化研究年報』第6号，2017年に掲載）。ではなぜ片岡勝はこれを持っていたのでしょう。いや，そもそも片岡勝とは誰なのでしょうか。

片岡は日本初のプロ野球チーム「日本運動協会」の選手でした（図2）。彼は1905年6月山口の萩に生まれ，3歳で両親とともに中国大陸へ移住，大連商業学校に進学し野球部に所属しました。そして1920年日本運動協会の見習選手募集に応募し，捕手として採用されることになりました。ところが，この協会は関東大震災の余波で解散してしまいます。そこに手を差し伸べたのが小林一三の阪急でした。

図２　日本運動協会選手写真 後列右端が片岡勝（阪急文化財団蔵）

阪急にとってスポーツ事業はこれが初めてではありませんでした。全国中等学校優勝野球大会（現全国高等学校野球選手権大会）や日米大学野球戦の会場になった豊中グラウンドを運営していたのは阪急でした。解散した日本初のプロ野球チームを引き継ぐ1924年には，豊中から宝塚にグラウンドを移転していました。この宝塚を拠点にして，日本運動協会は「宝塚運動協会」と名を改めて再始動することになりました。片岡らほとんどのメンバーが宝塚に住居を移しました。1929年には宝塚運動協会も解散しますが，やがて日本にプロリーグ設立の機運が高まると阪急もこれに加わり，のちに阪急ブレーブスとなる球団「阪急」を結成します。1936年3月のことでした。片岡はこのチームの裏方として1948年の退社まで活躍しました。

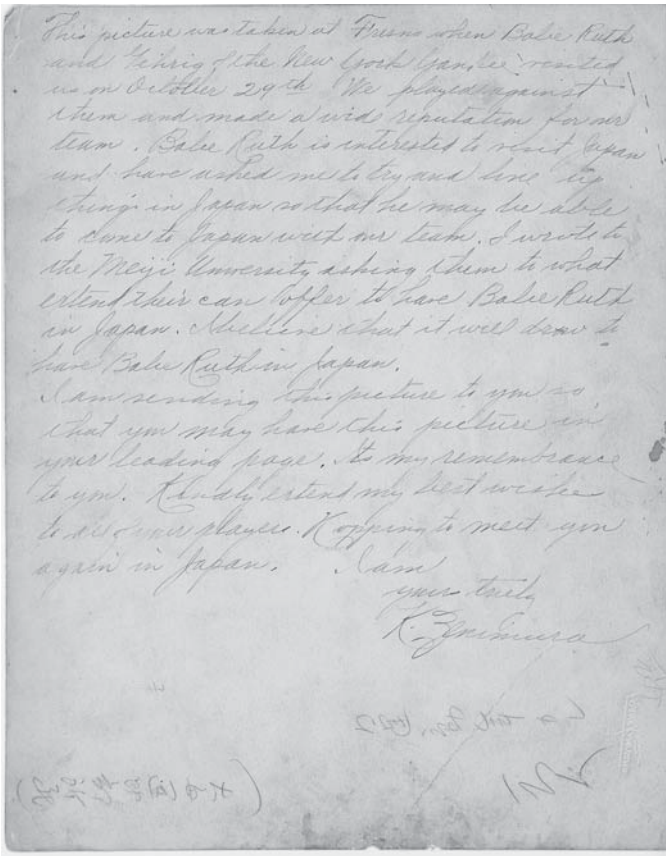
つまり片岡勝は日本運動協会・宝塚運動協会・阪急という，いわゆる「もう一つのプロ野球」と現在のプロ野球の両方を，選手としてスタッフとして渡り歩いた人だったのです。私たち阪急グループの財団に寄贈されたのはこうした経緯からです。

写真はどこから

では元に戻って，なぜ片岡はこの写真を持っていたのでしょうか。裏の文面にはK. Zenimuraとサインがあります（図3）。差出人は銭村健一郎本人で間違いありません。しかしながら宛名は書かれていませんし，封筒も見つかっていません。片岡はどこでこの写真を入手したのでしょうか。考えられるのは，銭村から直接受け取ったか，あるいは，別のところを経

由して間接的に受け取ったかです。

直接受け取った可能性はあります。というのも，銭村率いる「フレズノ野球団」はステイプルズさんの報告のとおり三度訪日していますが，そのうち1924年と1927年には宝塚運動協会とも対戦しているからです。1927年は兵役に就いていたためか片岡の出場記録はありませんが，1924年はお互い選手として顔を合わせています。フレズノのチームとの記念写真は残念ながら見たことがありませんが，宝塚運動協会と海外の対戦チームが一緒に写った記念写真は多く残されています。これらの写真は，試合というものが単に観衆を喜ばせるためだけではなく，チーム同士の親交を結ぶ機会でもあったことを伝えています。対戦を通じて片岡と銭村の間に交友関係が生まれていたとしても不思議はないでしょう。



This picture was taken at Fresno when Babe Ruth and Gehrig & the New York Yankee visited us on October 29th We played against them and made a wide reputation for our team. Babe Ruth is interested to visit Japan and have asked me to try and line up things in Japan so that he may be able to come to Japan with our team. I wrote to the Meiji University asking them to what extend their can offer to have Babe Ruth in Japan. I believe that it will draw to have Babe Ruth in Japan.

I am sending this picture to you so that you may have this picture in your leading page. Its my remembrance to you. Kindly extend my best wishes to all of your players. Hopping to meet you again in Japan.

I am
yours truly
K. Zenimura

図３　銭村健一郎送信写真裏面（Kenso Zenimura 氏の御厚意により掲載）
This picture was taken at Fresno when Babe Ruth and Gehrig & the New York Yankee visited us on October 29th We played against them and made a wide reputation for our team. Babe Ruth is interested to visit Japan and have asked me to try and line up things in Japan so that he may be able to come to Japan with our team. I wrote to the Meiji University asking them to what extend their can offer to have Babe Ruth in Japan. I believe that it will draw to have Babe Ruth in Japan.
I am sending this picture to you so that you may have this picture in your leading page. Its my remembrance to you. Kindly extend my best wishes to all of your players. Hopping to meet you again in Japan.
I am yours truly K. Zenimura
運動年カン　一頁
（大毎運動部所蔵，英文は原文のママ）

しかしもう一つの可能性，すなわち，どこかを経由して入手したと考える方が妥当のように思われます。どこかとはどこか。それは「大阪毎日新聞社」です。なぜか。写真の裏のメッセージには「so that you may have this picture in your leading page」とあります。これは写真の送付先が出版社，新聞社であることを窺わせます。そして「all of your players」はその会社が野球チームを持っていることを示しているでしょう。当時，野球チームを持っている出版社，新聞社といえば，第一に大阪毎日新聞社を挙げなければならないでしょう。「大毎」の愛称で知られたこのチームは，大学出身の有名選手を多数擁し，アメリカにも遠征するほどで

した。名目はプロではありませんでしたが，相当の人気と実力を兼ね備えたチームでした。宝塚運動協会ともフレズノ野球団とも対戦しています。

そのうえで，鉛筆による日本語の書き込みにも注目してみましょう。「運動年カン」「一頁」「大毎運動部所蔵」と読めます。これは一体何を指しているのでしょうか。「運動年カン」「一頁」は，1928年3月に大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が刊行した『昭和三年版スポーツ年鑑（Aの巻）』の口絵を指しているのかも知れません。というのも，この年鑑には今回の写真と同じものが掲載されているからです。そうすると，「大毎運動部所蔵」はまさしくこの写真がもともと大阪毎日新聞社のものだということを示しており，後になって何らかの理由により片岡の手に渡った，と考えるのが妥当ではないでしょうか。

銭村健一郎が伝えたこと

それでは銭村はこの写真を用いて，何を大毎に伝えようとしたのでしょうか。写真はベーブ・ルースらと面識があることの証拠となり，メッセージの信憑性を高めたことでしょう。文面を日本語で読みあげます。「この写真はベーブ・ルースとゲーリッグ，ニューヨーク・ヤンキースが10月29日にフレズノの私たちを訪れたときに撮られたものです。私たちは彼らと対戦し大きな評判を得ました。ルースは訪日に関心を持っていて，私たちのチームと一緒に日本に行けるように，日本でのことを世話してくれないか私に頼んできました。私は明治大学に手紙を書いて，ルース招聘にどれだけ提供できるか尋ねています。ルース招聘は近づいていると信じています。お送りしたこの写真を巻頭ページに載せてもらっても構いません。あなたへの私の思い出の品です。どうか選手の皆さんによろしくお伝えください。日本でまた会えますように。」

ステイプルズさんの著書でも明らかなように，銭村がベーブ・ルースの訪日に関わっていたことについては銭村自身の証言がありました。Fresno Beeという現地新聞の1962年5月20日号に掲載されたインタビュー記事がそれです。しかしこの記事が言及しているのは，「銭村がこの写真を日本の新聞社に送った」ということと，その後「前金4万ドルでベーブ・ルースが日本でプレーできないか日本から問い合わせがあり，ルースに連絡したところ，彼は6万ドルなら行くと言った」ということの二つで，それ以上のことは分かりませんでした。もし銭村が新聞社に送ったという写真がこれだったなら，いや間違いなくそうでしょう，「写真を送ったこと」と「日本から問い合わせがあったこと」の因果関係が明らかになります。つまり，ベーブ・ルースの招聘話は新聞社からの提案ではなく，銭村の方から示唆されたものだったのです。

銭村が新聞社に写真とメッセージを送ったのはなぜでしょうか。たしかにニュース性が高い出来事ですし，写真の提供は取材協力ないし取材要請といった意味もあったかもしれません。しかしそれだけではないでしょう。当時の新聞社とりわけ大阪毎日新聞社は，数々の大規模スポーツイベントを主催したり後援したりする事業者でもありました。銭村は明治大学へ問い合わせつつ，新聞社にそれとなく打診していたとも考えられます。

このように見てくると，このメッセージ付き写真は，単にベーブ・ルースらと銭村が対戦した証拠であるばかりか，まさしく銭村が「太平洋を渡る橋」そのものであったことを示しているでしょう。写真にはベーブ・ルースらと銭村の交流が写されています。そして，それにメッセー

ジを添えて送ることができたのは，銭村と日本の野球界にも交流があったからにほかなりません。

想像力の翼を広げて

最後に，想像力の翼を広げることが許されるなら次の二点を挙げましょう。一つ目，これまでベーブ・ルース訪日に関する言説は当事者である読売新聞社が記すように，1929 年 8 月，報知新聞社の池田林儀が正力松太郎に持ちかけたところから始まります。では，池田はどこからベーブ・ルース訪日の可能性を知り得たのでしょうか。先の Fresno Bee によれば銭村が写真を送った先は newspapers であり，複数だった可能性があります。そこに報知新聞社も含まれていたとしたらどうでしょうか。つまり，1934 年のベーブ・ルースらメジャーリーガーの来日の発端は，この銭村のメッセージ付き写真ではないかということです。

二つ目，なぜ大阪毎日新聞社から宝塚運動協会の片岡にこの写真が渡ったのでしょうか。大毎も報知新聞と同様にベーブ・ルースの招聘に関心を持った。しかし単独で行うにはリスクが大きかった。そこで宝塚運動協会というプロ野球チームを持ち，さまざまな事業において友好関係にあった阪急に協力の可能性を打診しようとした。その時に参考資料として手渡されたのではないか，ということです。いずれも証拠のない話ですが，いかがでしょうか。以上で終わりです。